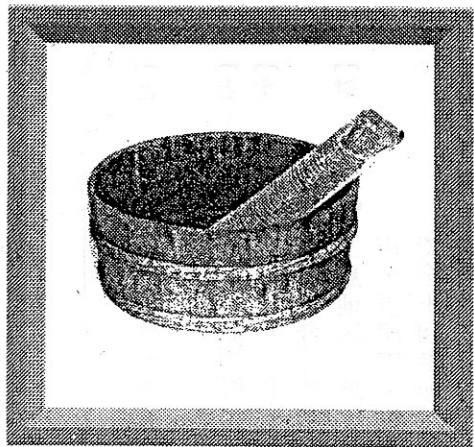




道具は語る 摂津市の昔の暮らし

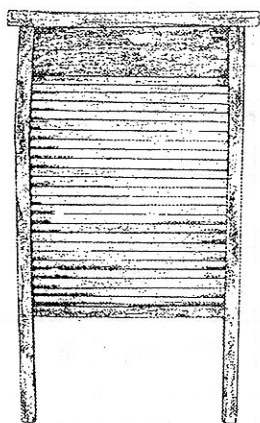
ちょっと



たらいと洗濯板

縦約 60cm、横約 30cm、厚さ約 1cm 位のセンノキかマツの板で、表裏、上下を少し残して、中央部分に横に細かく刻み目をつけてあります。ここから、痩せてあばら骨の見える人の胸のことを洗濯板などといったりました。

ヨーロッパの洗濯板



(19世紀末)

石鹸は1世紀には作られていたと言われています。13世紀から15世紀にかけて盛んになり、フランスを中心として家内工業が発達しました。その後本格的な近代化学工業として飛躍的な発展をみせました。これに伴って洗濯方法も変化し、洗濯板が出現しました。



郷土摂津
いにしえ通信

第28号

平成十二年八月一日
発行
摂津市教育委員会
生涯学習部生涯学習課

第4回 洗う 洗濯板

電気洗濯機以前の盥(たらい)時代、洗濯板はなくてはならない洗濯道具でした。洗濯板を盥の縁に斜めにつけて、この上で洗濯物に石鹸をすりつけ、汚れを揉み出します。洗濯板がヨーロッパから入ってきたのは幕末ですが、使われだしたのは意外に新しく、明治の末から大正にかけてでした。洗濯板と石鹸と一対のもので、石鹸が使用されるようになってから洗濯板が出来ました。一般にまで普及したのは大正時

代中頃でした。

以後、大正後期から昭和と、日本人の衣生活も大きく変わっていききました。シャツやYシャツなど洗濯物は増える一方だったため、洗濯板はなくてはならない大事な道具となりました。

石鹸、洗濯板を使うようになって清潔度は高くなりました。しかし、しゃがんで洗濯板に体重をかけ、力を入れて揉みだすようになってから、労働がきつくなったのも確かです。

平成12年度・三島地区生涯学習広域事業

三島路ひざくりげ

総集編

歴史の

心の

そして私たちのふるさと

往復ハガキに、①住所②氏名③年令④電話番号、返信用はがきにあて先を明記のうえ、平成12年9月8日（必着）、下記へお申し込みください。

申し込み方法

567-8505

茨木市駅前三丁目8-13

茨木市教育委員会社会教育課内

三島地区広域事業事務局

- 【とき】十月四日（水）から十二月六日（水）まで
- 【ところ】会場は各市町により異なります
- 【定員】一〇〇名（各市町二十名・申し込み多数の場合は抽選）
- 【対象者】三島地区（島本町・高槻市・茨木市・摂津市・吹田市に在住・在勤で全十回参加可能な方）
- 【参加費】保険代三〇〇円（交通費は自己負担）

	とき	内 容	と ころ
吹田市	10月 4日（水）	仏像の心とふるさと	吹田市立博物館
	10月11日（水）	旧石器時代の道～旧石器人やナウマン象の通った淀川回廊	関西大学博物館
茨木市	10月16日（月）	三島地域の街道	茨木市福祉会館
	10月25日（水）	民謡・民舞を通して考える「ふるさと茨木」	茨木市福祉会館
高槻市	10月27日（金）	土佐日記・伊勢物語に見る高槻	高槻市立市民総合センター
	11月 8日（水）	高槻の変遷～近代の高槻～	高槻市立城内公民館
島本町	11月15日（水）	京都と摂津国を結ぶふたつの道	島本町ふれあいセンター
	11月22日（水）	桜井楠公会顛末記	島本町ふれあいセンター
摂津市	11月29日（水）	郷土玩具界から見た摂津（狛犬他）	摂津市総合福祉会館
	12月 6日（水）	三宅の歴史～古代から現代まで～	摂津市総合福祉会館

◎講座いずれも午後2時から4時までです。前回に引き続きバラエティに富んだ講師陣がみなさまをお待ちしています。ふるってご応募ください。

郷土撰津いにしえ通信

鳥養の歴史

近世の治水(一)

日本の河川は一般に、両岸に堤防が連続しています。外国の河川は、必ずしもそうではありません。堤防は洪水の氾濫に備えてのものであり、外国と比べて日本には、洪水や氾濫が発生する河川が非常に多いということです。

日本の河川は、流路が短く、勾配が急で、外国の河川と比較すれば、日本の河川はわずかの距離を駆け下る「滝」に相当すると言われています。日本の河川は、流域の大部分が山地で、平野部が少ないことや、台風や梅雨の影響で降雨量の集中は高いのも特徴で、洪水流域が大きくなります。

日本では、水田農耕文化が定着したときから、すでに洪水氾濫を自然条件として受け入れてきました。そして、自然堤防や高台に住居、集落を分布させ、低湿地に水田をつくってきました。

また、河岸段丘の高いところにも集落を形成し、低いところに水田を分布させました。洪水氾濫を経験しながら、生産の基盤を形成し堤防やさまざまな工夫を進め、人間の手の入った新たな自然環境をつくりだしてきました。治水の三要素とは、堤防・浚渫(しゅんせつ)・分水と言われ、それぞれ単独で効果を発揮するよりも、多くは組み合わせられて使われてきました。

鳥養(淀川低湿地帯)は、比較的資料の整っている江戸時代から現代までの約三六〇年間に四十回の氾濫が記録されています。氾濫とともに低地地域の人々を悩ましたのが「内水」問題です。洪水から家と耕地を守るための堤防は、内に溜まった水(内水)を排除する場合には大きな障害になりかねませんでした。江戸時代以前から上手と下手の対立の原因となったり、また、排水技術の開発もうながしました。

悪水の処理にまず必要な水利施設は排水路でした。悪水井路、悪水抜、悪水吐、水抜、井溝、水道など色々な呼び名があります排水路は、

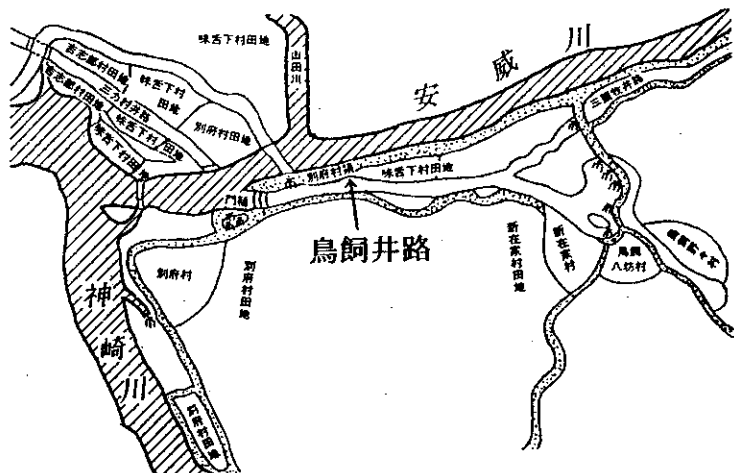
村々の悪水を集めて河川へ注いでいました。低湿地の村々の排水先である淀川・神崎川・安威川の川床が上昇するにつれて、それぞれの水利組織や村々の領内から直接河川へ排水することが困難になると、より下流へ排出先を求めて長い井路を開削するようになりました。

慶安三年(一六五〇年)七月二十七・二十八日の両日には、大風雨のため賀茂川・淀川・神崎川が決壊し、流域一帯に大洪水をもたらされました。さらに八月二十九日から九月二日にかけては霖雨となり、堤防や民家畜の被害が一層増加しました。そこで、幕府は水害地の巡見のため役人を派遣しました。水害地を巡見し、京に滞在していたとき、水害地の高槻藩領鳥養の農民によって、内々に新井路掘削の訴願が行われました。

鳥養村の水利事情についての問題点は用水よりも悪水にあり、ことに降雨が続いたときの過剰水の排除にありました。安威川沿いに隔流堤の頼殿縄手を築くなどの措置にもかかわらず、安威川川床の上昇が排水能力を低下させたため、慶安三年の水害が一層増幅され、鳥養村の訴願となりました。鳥養の下手にある別府・吉志部・味舌下の三か村からは「鳥養のため面々之田地掘われ、何共迷惑至極」と反対する態度が示されました。井路床の代替地を鳥養村からとり、将来不都合な事態が発生すれば井路を埋めることを条件に、新井路掘削を承引するよう説得が行われました。

(次号に続く)

鳥飼井路



神安水利史本文編、週刊朝日百科「日本の歴史」より

担当 (茗荷)

摂津市と水田の考古学

第28回

摂津市と水田の考古学

摂津市域の条里制(四)

摂津市を含む三嶋地方の条里は、正東西・南北に展開する嶋上郡・嶋下郡の条里を主体としながらも、摂津市域・吹田市域においては約三十三度北西へ方位が転換していくという指摘があります。このことは、服部昌之氏が『人文研究二三一八』の中で「淀川右岸地域の条里と水無瀬庄」という論文で考察されています。下記に一部を抜粋します。

この論文でも指摘されていますが、注目すべきは、境川と条里の関係です。境川は千里丘陵に発して安威川に注ぐ河川ですが、この境川を境にして東西の条里の軸が変わっているのです。

条里制の施行は郡単位で行われ、郡の境において、条里のずれが見られることは広く知られています。しかし、畿内では条里のほとんどが東西南北正方位を持つのが普通で西へ三十三度振った条里は異質な部類に属すると言えます。このちがいをどう評価するかは、各地域の条里施行開始時期の問題があり慎重な考察が必要で。しかし、かりに条里施行当初からのものとみるならば、大きな意味を持つてきます。さきに述べたとおり条里制は郡単位で施行されている例が多く、境川が郡界をなす可能性がでてくるからです。

実際は旧の国郡制では境川の両側はともに嶋下郡に属しており先の想定は難しいと言わざるをえないというのが現状です。また、茨木市域の条里制は長地型が多くみられますが、摂津市域では半折型が多く、長地型が少なくないという指摘もあります。これは古い伝承からは、大化の改新以前は長地型が多くあったと推定されることから先の想定には難しいものがあります。いずれにしても、これらの考察は現地表面から

の考察によるところが多く、実際の発掘調査によって明らかにしていくものと思います。(つづく)

(参)服部昌之 淀川右岸地域の条里と水無瀬庄『人文研究23-8』より

摂津市の旧味舌上・庄屋・正音寺・味舌下から吹田市吉志部・旧吹田にかけては、天坊幸彦氏が指摘したように三島地区の主条里とは別系統の、N33度W方位の条里地割が存在する。この条里地割と主条里の接点は境川であって、現在摂津市千里丘東1丁目・2丁目・3丁目・昭和園・香露園となっている旧三宅村乙辻・太中・小坪井には、茨木市域から主条里が及んでおり、島下南部条里は境川以西に分布する。千里丘陵に付帯する低位段丘と扇状地には地割が認められず、山田川と正雀川の谷底平野に連絡する地点では市場池付近におよび、逆に南方は安威川沿いの標高3m強の低地にも検出される。

の考察によるところが多く、実際の発掘調査によって明らかにしていくものと思います。(つづく)



摂津市所蔵・近代の船

担当 (伊部)

【ふ】船

○日本では古くから水上交通の手段として、丸木材を組み合わせて利用した筏(いかだ)や丸い丸太材を割り貫いてつくった刳船(くりぶね)が発達しました。○そして次第に構造船が発達します。さらに小さく、さほど接合しなかったり、横梁を張った設けたり、(ぶ)や舳(へさき)や艫(とも)にも工夫をこらすようになります。○その後大陸の造船技術の影響を受けて発達し、遣唐使のために造られた大陸航行用のものが造られます。○なお船の丸号も平安時代末から使われたとされています

あ

からあはる船